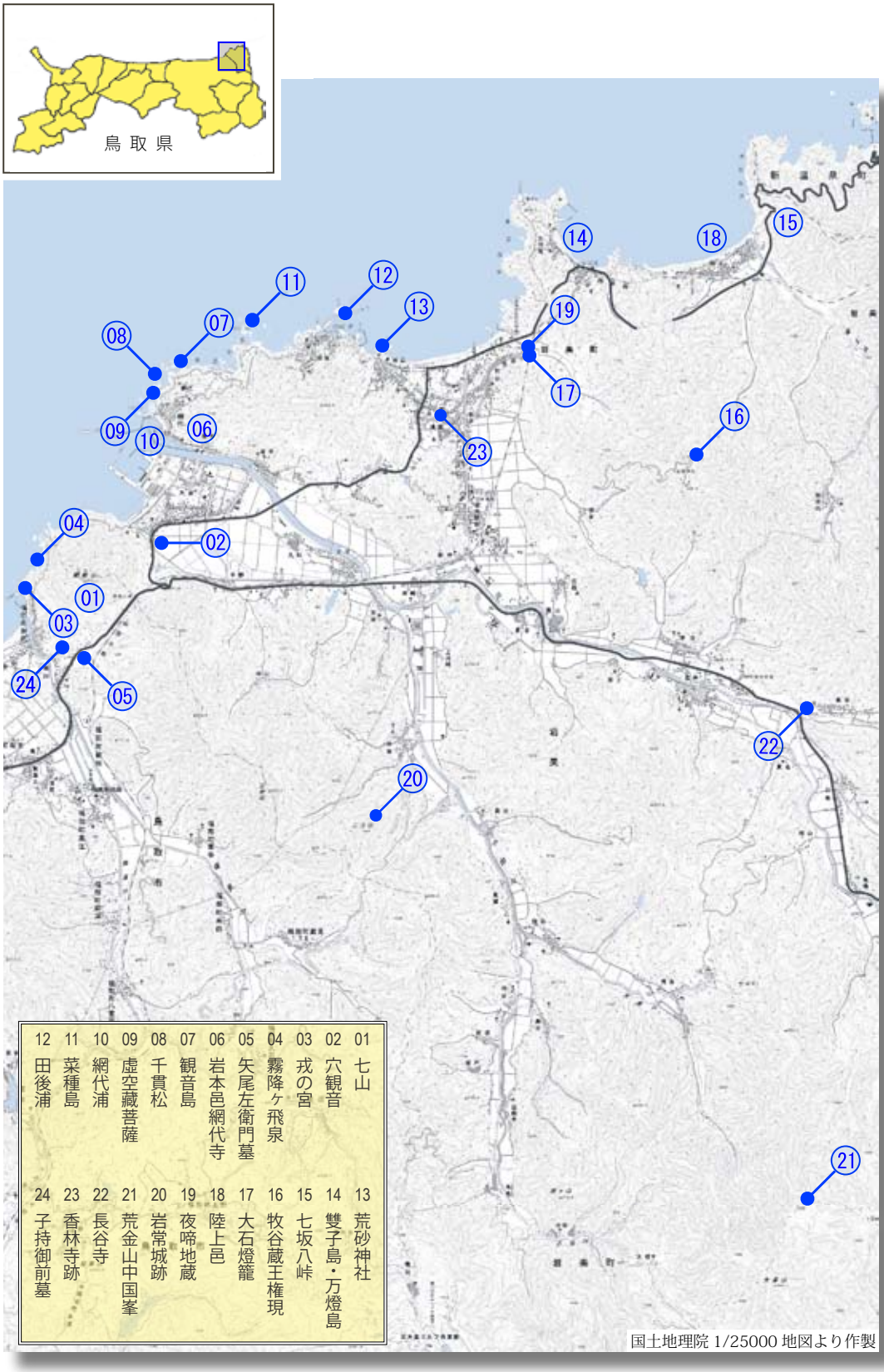
『稲葉佳景無駄安留記』調査報告（岩井郡篇）


鳥 取 県
01 七山
02 穴観音
03 戎の宮
04 霧降ヶ飛泉
05 矢尾左衛門墓
06 岩本邑網代寺
07 観音島
08 千貫松
09 虚空蔵菩薩
10 網代浦
11 菜種島
12 田後浦
13 荒砂神社
14 雙子島・万燈島
15 七坂八峠
16 牧谷蔵王権現
17 大石燈籠
18 陸上邑
19 夜啼地蔵
20 岩常城跡
21 荒金山中国峯
22 長谷寺
23 香林寺跡
24 子持御前墓
国土地理院 1/25000 地図より作製

七山

七山は鳥取県東部、岩美町と鳥取市福部町の間にある。ここにはかつて牧場があり、多くの名馬を産出したという。そのため七山は「駟馳山」と書かれるようになった。無駄安留記には、「海岸最一の高山なり。絶頂に駒ヶ池あり。鎌倉殿の駿馬池月なるもの出産の地なり。池の形僅かに残り」とあり、海岸で最も高い山で、頂上には池の跡があり、鎌倉殿の駿馬池月誕生の地である、と書かれている。

七山は、現在でも高い山であり、無駄安留記に書かれている絵と大変似ている。これだけ大きく目立つ山なので、無駄安留記によれば漁師達に天気の変化を教える霊山とされていたという。頂上の池は噴火口の跡である。

次に鎌倉殿の駿馬である池月についてだが、『福部村誌』によると、昔、この山に一匹の馬がいた。母馬を早くに亡くしたので、この馬は、母を尋ねていつも山中を走っていた。あるときは誤って日本海に落ち、あるときは勢い余って頂上から跳び降りた。こうして自然に水泳を覚え、健脚にもなったので、土地の豪族から源頼朝に献上された。そしてこれが『平家物語』の「宇治川の先陣争い」で源氏の武将佐々木四郎高綱が騎乗する名馬池月になったという。

池月は「宇治川の先陣争い」においては見事に先陣を切り、名を馳せたといわれている。その当時、合戦において先陣を切るということは、戦いの勝敗を決する大きな要素となった。敵陣より放たれる矢が飛んでくる中を、駆け入る訳であるので、まさに命懸けの行為であるが、戦いに勝てば、先陣を切った者は、一番の功労者として、莫大な恩賞と名誉を手にすることが出来たのである。

また無駄安留記の記述は、池月は七山の山頂で生まれた、と解釈できる。しかし現在は七山付近の国道沿いに「生月誕生の地」の看板がある。そこで出生に関してインターネットで見たところ、島根県隠岐郡で生まれたとする説や徳島県美馬市で生まれたとする説など、全国に諸説存在するということである。

（川添　祐紀）

国道沿いの看板

穴観音

穴観音は駟馳山南東の岩美町大谷にあり、無駄安留記が書かれた当時、古墳の内部に安置されていた。この古墳は小畑古墳群のうちの一基であり、穴観音古墳ともいう。小畑古墳群は、駟馳山峠から大谷平野へ下る丘陵の裾野に立地する古墳群である。

写真2が古墳内部の横穴式石室に観音像が安置されている様子を写したものだ。観音像はコの字型に並んでいたようである。無駄安留記には「峠なる茶屋の向三十三の石体を安置す」という記述がある。しかし、平成二年、石室崩壊の危険性のため、観音像は取り出され別に安置所が設けられた。

穴観音古墳は、古墳時代後期に築造されたものである。石室は全長が一一メートル二〇センチあり、鳥取県内でもっとも長い。玄室の長さは高いところでは三メートル五〇センチもある中高式天井の構築で、大きな切石が使用されている。この「中高天井」は因幡東部に独特のものである。観音像がこの古墳に祭られるようになった由来は次のように言い伝えられている。

万治元年（一六五八）以降、浜大谷（現在の岩美町大谷）の田んぼの水利・干拓事業が、計画的・積極的に行われるようになり、事業の進展とともに和田氏の初代得中、三代又市（忠太夫）が、現場の指揮を命じられた。和田得中は武士で、大谷のほかに岩井郡西部の細川池や湯山池（現在の福部町）などでも藩の許可を得て新田開発を行っている。

安置されている石造観音菩薩三十三体は、安永年間（一七七二～一七八一）のころ事業達成大願成就の記念として、忠太夫が発起し、村内および近郷の有志によって寄進されたものである。

この干拓事業達成の祈りと喜びが、観音菩薩の救世護身の本願と習合して、観音信仰の興隆を招来したのではないか。この観音信仰については、無駄安留記に書かれている次の狂歌からも知ることができる。

大悲なるかげおがまむと土あなに
はひこむひともありとこそ見れ

大悲とは衆生の苦を哀れみ救う仏の大慈悲のこと。そのような姿をしている観音像を拝もうと土穴に這いこむ人もいるのであった、という意味になる。土穴に這って入ってでも拝みたいほど、穴観音は信仰されていたということだろう。この狂歌から、当時の人々のこの観音像に対する深い思い入れが読み取れるのではないだろうか。

参考文献　『岩美町誌』（岩美町、一九六九年）。『鳥取県の地名』（平凡社、一九九四年）。『鳥取県の古墳』（鳥取県埋蔵文化センター、一九八六年）。『日本の古代遺跡九鳥取』（保育社、一九八三年）。

（岸田 祐子）

写真1 穴観音古墳（現在は立入禁止）

写真2 かつての古墳内部の穴観音（『日本の古代遺跡九 鳥取』より）

写真3 現在の穴観音三十三体

戎の宮

駟馳山の西の麓に戎の宮がある。戎とは、海上・漁業の神として信仰され、風折烏帽子をかぶり、鯛を釣り上げている姿の神として知られている。岩美町浦富では不漁が続くと、「えびすおこし」と称し一同が酒を飲むということから（『鳥取県大百科事典』新日本海新聞社、一九八四年）、おそらく付近の漁師においても大漁祈願を願うため、そこに祀ったのではないかと考えられる。

無駄安留記には戎の宮について次のように記述されている。

村中を過て巉岩をよぢ登れば戎の宮に到る。海上の遠望無双の風景なり。

「村中」の「村」とは岩戸村のことである。岩戸村を過ぎて、険しい岩のあるところを登ると、戎の祠がある。その戎の祠からの眺めは他に比べるものが無いくらい素晴らしいものであったようだ。つづいて、著者はさらに上に登ったところにある魚見小屋まで進んで、景色についてこのような狂歌を読んでいる。

今日もまた　草臥（くたびれ）ぬらむ　あかねさす
夕日の脚を　洗ふ海づら

これをわかりやすく解釈すると、「今日もまた太陽がくたびれたのだろう、夕方になって、夕日の脚を海面が洗っている」という意味である。広々とした海に一日の旅を終えた太陽が沈んでゆく雄大な光景を、著者が賞賛していることが窺える。

実地調査の時に撮った写真は、戎の宮付近を撮ったもの、山を登って撮った戎の祠、その前にあった石燈籠で、無駄安留記の絵と比べてみると、ほぼ同じような位置に祠があることが確認できる。その建物は戎の祠であろうと考えられるが、現在はブロックで固められ、祠も施錠してあるので、祠の中までは確認できなかった。また隣にあった石燈籠には、「天保十三年寅五月」と書かれてあることより、戎の宮が創建されたのは、おそくとも天保十三年（一八四二）だということがわかる。

戎の祠があることを確認するために山に少し登ったが、今でもそこから見える景色は、日本海を雄大に見渡せる素晴らしい景色であり、天下の絶景といえるであろう。

（玉木　一成）

霧降ヶ飛泉

現在、「霧降ヶ飛泉」という名は地元にも伝わっていないようであるが、岩戸港に面する駟馳山の遊歩道沿いに連なる、一〇〇メートルをはるかに越える断崖の続く「滝ヶ磯」に、雨の後に現れる滝ではないかと思われる。無駄安留記には、次のような記述がある。

巍々たる岩壁千仞の上より白玉散乱として常に霧のみふれり。巖下は白浪うちよせて皷声をなす。此処幽蔭として異郷の如し。

岩戸港より遊歩道に沿って七〇〇メートルほど進むと、断崖の続く滝ヶ磯に出る。この海岸は人頭大の円磨された礫が隙間なく並ぶ礫浜海岸で、沖には離れ島が浮かび、高い断崖を背景に雄大な景色が展開されて景勝地となっている。

この海岸の入り口に六角形の石の柱を横に積み上げたような岩壁が見られる。この岩壁は高さが一〇〇メートル、幅が三〇メートルほどあり、降雨後は周りの谷水を集めて滝となるためこの海岸の名前の由来となっているものと思われる。

この滝が霧降ヶ飛泉なのではないかと思われるが、雨の後にだけ滝が現れるという点が、「常に霧のみふれり」という記述とくい違っているので、疑問が残る。

駟馳山の遊歩道についてであるが、駟馳山は標高三四〇メートルの独立峰で、基盤の軟らかい凝灰岩とその上に乗った硬い安山岩から出来ている。基盤の凝灰岩は日本海の荒波に削られ、その上の安山岩は崩れにくいため、一〇〇メートルにも及ぶ垂直な断崖となっている。遊歩道はこの断崖の上を通り、途中に展望台があり、滝ヶ磯に通ずる支線が別れる。これを行けば絶壁から見下ろす風景や、降雨時や雪解けにかかる滝ヶ磯の大滝などが、訪れる人の目を楽しませてくれるはずなのだが、この道は崩落により進入禁止となっていて、行くことができなかった。

無駄安留記中の絵を見てみると、右下に大きな岩があり、岩の左横に滝があるのが見えるが、これが「霧降ヶ飛泉」である。滝の真下に石燈籠があり、近くに二人の人物が描かれている。現在の様子を撮った写真を見ると、石燈籠以外は無駄安留記の絵と同じような風景を確認することができた。写真の楕円で囲った部分の中央あたりの、少し暗い筋になって見える辺りが霧降ヶ飛泉ではないかと推測する。

（八田 麻未）

矢尾左衛門の墓

無駄安留記岩井郡の七山坂の項に「この七山阪往古は道滑らかにて往還わずらはしかりしが□□の頃廻国某敷石を造すと。奇特なるかな。この阪口に矢尾左衛門墓とて在」とある。現代語訳は「昔この七山坂は滑りやすく行き来が楽ではなかったが、ある時（『鳥取県の地名』（平凡社）によると一八二五年のことらしい）ある廻国（当時諸国を旅していた現在のお遍路さんのような人）が石畳を敷いたという。奇特な人だ。そしてこの坂の口に矢尾左衛門の墓がある。」となる。

ここには

やすやすと四手や三途を越えゆかん
七の山路を造る人なら

という狂歌も載っている。現代語に直すと「やすやすと死出の山道や三途の川を越えて行くことだろう。七山の山道を造るという善行を行い徳を積んだ人ならば。」となるだろう。廻国の偉業に対する感嘆の歌と解釈できる。三途の「三」と四手（死出）の「四」は七山の「七」と数字つながりで出されたとも考えられる。

矢尾左衛門と牛尾大蔵左衛門は違うという指摘を受けそうだが、原文は矢尾左衛門の文字の上に塗り潰したような跡があり、矢尾左衛門の矢の字と牛尾大蔵左衛門の牛の字は似ているので牛尾左衛門を間違えて矢尾左衛門と書いてしまい、それが書き直されないまま残ったのではないかとも考えられる。事実、無駄安留記拾遺巻には「大蔵左衛門の墓」という名で「矢尾左衛門の墓」と似たような記述がある。

牛尾大蔵左衛門の墓は、県道三一九号線と国道九号線が交差するガソリンスタンド（鳥取市福部町、旧福部村）の付近にある（場所は、その近くのたこ焼屋の店員さんに教えて頂いた）。木の陰になった目立たない階段を降りると、牛尾大蔵左衛門の墓と碑が建っている。

墓は五つに石を組み合わせて作られた五輪塔と呼ばれる形式のもので、五輪卒塔婆とも言う。花が活けられ蝋燭が立てられている点等から人の手が入っていることがわかる。この墓が近在の人々によ

り現在も供養されているということだろうか。たしかに、墓と碑の脇にあった看板にもこの場所が古くから五輪の森、または大蔵さんと呼ばれ地元の人によって守られてきたと書かれていた。

牛尾大蔵左衛門は本名を牛尾大蔵左衛門春重といい、毛利氏に仕える出雲（現在の島根県）の人だった。それがなぜ鳥取に来たのか。『因幡志』ではこう説明されている。それは天正の初め（天正年間は一五七三年～一五九二年）秀吉の鳥取攻めの際、元は毛利方であった鳥取城主・山名豊国が秀吉についたことで家臣が反乱を起こし主君を追放した折、毛利氏に武将を貸してくれるよう頼んだのだが、そこで派遣されたのが大蔵左衛門だった。大蔵左衛門は優れた武将で、敵将が立て籠もった城を攻める時も先陣を切り大いに味方の士気を上げたそうだが、その時城内から矢で射られその傷が元で亡くなり当地に葬られたという。

しかしこれには異説がある。『新編 福部村誌』によれば、牛尾大蔵左衛門は鳥取では死なず主君である毛利氏の許へ帰還した後亡くなったのではないかとされている。その根拠は、その後も毛利氏に牛尾大蔵左衛門が仕えていたことを示す資料に加えて天正十四年が彼の没年であるという資料が存在するからである。さらに、牛尾大蔵左衛門が落命した原因と目されている戦いは天正八年に起こり同年内に終わったと推定されている。これ等の資料の存在から『新編 福部村誌』では『因幡志』のような説は、何か他の伝承と混同されてしまったものと考察されている。といってもこれはあくまで現代の調査の結果としてそう考えられているのであり、恐らく無駄安留記の書かれた当時には『因幡志』のような説が主流であったのではないかと思われる。

（岡村 由季子）

岩本邑網代寺

無駄安留記の本文には、「本尊観世音は往古網代海中観音嶋より出現」とあり、これについては『因幡志』にも同様の記述が見られる。それによるとこの網代寺は、大同元年（八〇六）三月十八日に漁夫が海上の岩の上より見つけた尊像を安置するために建てられたもののようである。そして、この本尊観世音は後に因幡巡礼二十四番之札所となっている。

次に狂歌について触れてゆきたいと思う。無駄安留記の網代寺の項には次のような狂歌が書かれていた。

浦人の罪ふかくとも観音の御手にや救ふ網の名の寺

ここで言う「浦人たちの罪」というのは、漁師たちが魚などを獲ることを業としていることに加え、この網代の地が古くは罪人たちの送られてくる場所であったということも含まれているのではないかと思われる。

この網代寺は、正しくは「古海山網代寺観照院」といい、大永年間（一五二一～一五二八）の盗難と、文禄二年（一五九三）の洪水による倒壊のために、もとは網代にあったものが岩本に移されたようである。

「網代」という地名については、正平十五年（一三六〇）に鋳造された釣鐘に「因州巨濃郡阿代寺」と刻まれており、この正平という年号は南北朝時代のものであるので、この名はその頃からあったと思われる。ちなみに、この「阿」という文字は「湾曲して入り組んだところ」という

阿代寺の鐘。写真は、『鳥取県大百科事典』（新日本海新聞社、一九八四年）より

意味で用いられているようである。「網代」とは字が異なるのだが、これは意識的に用いられたものであると推測される。また、「網代」とは漁夫が網の所有者に支払う網の使用料のことである（以上については『新編岩美町誌　上巻』参照）。

次に、先ほど出てきた阿代寺の釣鐘についてであるが、『新編岩美町誌　下巻』によると、これは因州巨濃郡阿代寺の鐘のことであり、この鐘は明治二十年（一八八七）頃に網代の山畑から掘り出されたものである。南北朝時代に当たる正平十五年（一三六〇）に僧である行快という人物が大願主となって天地長久、国土泰平、庄内安穏を願って作られたものであると書かれていた。そして一九八五年に県保護文化財に指定され、現在では鳥取県立博物館に置かれている。この鐘は、鐘身五九センチ、総高七九・五センチ、口径四九・二センチとそれ程大きなものではない。また、『因幡志』に「文禄年間（一五九二～一五九六）洪水で仏閣ことごとく顚倒した」とあり、これは土中に埋没した原因ではないかと考えられる。

また、網代には網代神社と呼ばれる神社が存在する。この網代神社について、もとは神宮寺として網代寺の中にあったものが神仏分離によって解体され、寺が無くなり神社のみが残ったのではないかという仮説を立てた。この網代神社はもとは日比屋村というところにあったものが、天正年中（一五七三～一五九二）に網代に移されたようである。このことから、網代寺とは、その存在時期と存在場所に共通点を見つけられなかったため、同時期に一箇所に存在した可能性はきわめて低いと思われる。よって、その関係は不明である。

盗難や洪水という様々な困難に見舞われてきた網代寺であるが、場所を移してまで立て直されるなど、無駄安留記に描かれて以降も地域の多くの人々の信仰に支えられてきたのだということが感じられた。

（尾崎　淳）

観音島

観音島は網代と磯の浦の間にある島とされている（2ページの地図の⑦参照）。無駄安留記の記述は以下のようである。

是観音出現の嶋にて　干今海士あやまりて
舟を当れば、仏罪を蒙るとて、近づく者なし。

名におぢて海士もゆるすか観音の
　千の御手にもあまるうろくづ

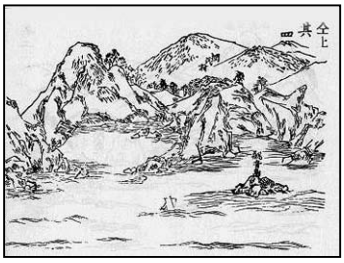
ここは観音が出現した島であって、今でも漁師がまちがって舟を当てたならば、仏罰を被るといって、近付く者はいない、とある。狂歌では、観音という名を怖がって、漁師も魚を捕らえないのだろうか。千手観音のもつ千本の手以上にたくさんいる小魚を、と詠んでいる。それほどこの島に伝わる観音出現の伝承は根強いものであったらしい。

同様のことが『新編岩美町誌　上巻』にも載っている。ここは水上に笠を伏せたような島であり、網代寺の本尊である黄金の千手観音像の出現した島との伝承があるところである。櫓や櫂が触れると仏罰があるとも言われ、舟も近づかないと『因幡志』に記述されている、とあるのだ。

そこで『因幡志』を見たところ、たしかに観音島に関する絵図と記述があった。そこには「水上宛も笠を伏したるが如くなり　大同の昔網代寺の本尊此石上に出現し給ひしといふ　櫓櫂を触れは仏罰を被るとて　漁人も舟を近づけずとぞ」と書かれていた。

これほどの伝承を持つ島なのだが、場所がわかる文献が少なかった。現地に赴いた際には、依藤英徳「浦富海岸の地形・地名・地質」（『鳥取地学会誌』第二号、一九九八年）という論文にある地図と『岩美町誌』記載の地図などを参考に観音島の場所を探したのだが、付近にたくさんの島があり、どの島なのかはっきりとわからなかった。

（川添　祐紀）



『因幡志』より

『新編岩美町誌　上巻』より

千貫松

千貫松とは、岩美町の網代海岸遊歩道より眺められる島の頂上に生えている松の名称である。この松の名前から、島の名前も千貫松島となっている。昭和三年の『内務省天然記念物長打報告 地質鉱物の部 第三集』には、千貫松島について次のように書かれている。千貫松島は網代の北方、断崖によって囲まれた湾内にある一島である。周囲五〇メートル、高さ一〇メートルで円錐状をなしている。岩島の頂上に一老松があって鳳の翅を開いたようで盆栽の如くであった。島の岩質は粗粒淡褐色の花崗岩で岩上に生育するものはただこの一樹のみであることもまた自然の妙趣である。この島には洞門が形成され更に洞窟ができている。洞門の幅は六メートル、高さ六メートル、奥行き二〇メートルである。さらにまたその洞門の中央部東北側に円形の洞門ができている。その洞門の直径は四メートル、奥行きは五メートルに達している。

藩主池田侯がこの浦に遊び島上の松を賞しわが庭園にこれを移すものあらば禄千貫を与えんと嘆賞した故事からこの松を「千貫松」といい、この島を「千貫松島」というとのことである。この老松は枯れたが代りの若松が青々と育っている。『岩美郡史』によると、故事に出てくる「藩主池田侯」とは鳥取藩二代目藩主池田綱清のことである。しかし、この故事が元々何に書かれていたのかは分からなかった。

無駄安留記には、「海辺第一の奇巖にして鼎の如く中は小艇を通す。この岩頂に幾千年を経たる老松岩間に根ざして其緑色勝れたり。実に希有の名株なり。故に千貫の称あり。」とあった。『因幡志』では、「千貫

松と号するは岩頭一樹の松也。幾世の塩風にさらされたる風情面白し。嶋根三ツに分れて鼎の足の如く其間を孤舟に棹して彼方此方に漕回り得べし。」となっていた。これらの記述から長い年月を経ている松が岩の頂に生えている様子がわかる。また、舟を通すことができる洞門があり、鼎の足のようであるとどちらにも書かれている。無駄安留記では「希有の名株」、『因幡志』では「幾世の塩風にさらされたる風情面白し」として、千貫松をほめたたえている。

無駄安留記、『因幡志』以外にも、千貫松のすばらしさをたたえて、たくさんの詩歌が作られてきた。漢詩人の国府犀東（こくぶさいとう）は、大正十五年に『浦富海巖勝区八景詠』の中で「千貫松暮雪」と題して千貫松のことを詠っている。

千貫松暮雪　国府犀東

一任石門銀浪衝
皚皚遙對玉芙蓉
翠巖夕奪兩般白
琦雪滿柯千貫松

白波が洞門を激しく叩いてしぶきが飛び、遙か彼方に白雪を頂いた山を望む。この雄大の景色も夕闇に包まれてしまうと、いつの間にか降り始めた美しい雪が千貫松の枝を白く染めてきた。（「浦富八景」パンフレットより）

一方無駄安留記では、次の狂歌が記載されている。

我見てもそれが價（あたい）は有磯波（ありそなみ）の
音にきこえし千貫の松

千貫松島は無駄安留記が書かれた時代と、国府犀東が漢詩を書いた時代も、現在とほぼ同じ様子で変わらず存在していたようだ。

（岸田 祐子）

虚空蔵菩薩（こくぞう）

まず始めに、虚空蔵菩薩がどのような菩薩なのかについて説明する。虚空蔵菩薩とは虚空のように広大無辺の福徳、智慧を蔵して、衆生の諸願を成就させるという菩薩だ。十三参りという、数え年で十三歳になった男女が厄落とし・開運・智慧授けのためにお参りにくる行事があり、京都の法輪寺が有名である。虚空蔵信仰は非常にバラエティに富んだ信仰で、虚空蔵菩薩の好物、あるいは乗り物だから、という理由でウナギを食べないといった風習を持つ地域があったり、水神、作神、蚕神、安産の神などとして信仰されていたりする。漁村である網代では海の守護神として祀られている。昔は沖を通る千石船もその帆を降ろして礼拝したほど漁民の信仰が厚かったと伝えられている。また、浦富海岸を巡る「島めぐり遊覧船」の船員の方の話によると、江戸時代にこの菩薩が盗難になったという伝承も地元に伝わっているということである。

この虚空蔵菩薩が祀られているのが、網代にある虚空蔵山だ。この山の頂上に虚空蔵菩薩を祀った祠があることからこの名前がついたという。無駄安留記の記述では「網代東崖岩壁数百丈の頂に小秀倉を建る。往こと危くして容易からず」とある。これを現代語訳すると、網代の東にある崖の岸壁数百丈の頂上に小さい祠を建てている。そこに行くのは危険で容易ではない、となり、祠を建てるのにも大変難儀であっただろうことが伺える。

この虚空蔵山は浦富八景の一つである。浦富八景は金沢市生まれの漢詩人で歴史地誌学者の国府犀東（こくぶさいとう）が浦富海岸を称えて作詩した漢詩の連作だ。国府犀東は昭和三年に浦富海岸が名勝天然記念物に指定されたときに関わった人物でもある。浦富八景の題材となったのが、屏風岩、龍神洞、蔵王嶋、荒砂神社、菜種五島、鴨ヶ磯、千貫松島、虚空蔵山である。虚空蔵山の情景は「虚空蔵夜雨（やう）」という詩で描かれている。一方、無駄安留記では虚空蔵山の情景は「佳景無双也」、つまり、他に比べるものがないほど景色が優れている、と記述されている。

無駄安留記に描かれている虚空蔵山の絵を現在の景色と比べてみると、山と岩の形がほぼ同じ状態で残っていることがわかった。江戸時代からその美しさを称えられた虚空蔵山は、当時と変わらない景観をとどめている。（岸本 美花）

網代浦（安政の築港）

網代は古くから漁港として漁民の根拠地であり、港は南西に面し、その背後は周りを山に囲まれている天然の良港である。網代の地は罪人を送った場所として、寺院も跡で発表してくれる網代寺をはじめ三ヶ寺あったといわれている。

大永・天文（一五二一～一五五五）のころ、但馬の群盗に襲われ、民家仏閣とも消滅してしまう。この網代の地が漁村としての歩みを始めたのは、寛永元年（一六二四）、石見国浜田の漁民が、焼け残っていた二軒の民家を住み家として漁業に従事してからであるといわれている。しかし、網代港は天然の良港になってはいるものの、冬季は北西の季節風に悩まされるという問題点があり、解決するには防波堤の必要不可欠であった。

その防波堤工事は安政期から文久期（一八五四～一八六四）にかけて行われることとなる。防波堤工事は安政六年（一八五九）ごろから岩本村在住の山奉行の監督下で鳥取藩直営の防波堤工事として実施されて、文久二年（一八六二）に完成する。防波堤工事に当たって、このときの藩主池田慶徳が大金を投じ、港の西方に積石防波堤を二条造ったことにより、港内は平穏になり、渡航船の停泊によく、舟も出入りも多くするようになったといわれている。工事により船舶の出入りができるようになり、無駄安留記の著者の見たまま思ったままに歌った狂歌がこのように残されている。

往かいの船の　泊の間をせむと
屏風のやうな　石をはこべる

これが無駄安留記に載っている狂歌である。網代浦に行き来する舟や停泊する場所を造ろうとして、石を運んだということがわかる。防波堤工事の目的は、防波堤を造るという目的だけではなく、豪雨による水害の防止、藩米の積み出し港の任に当てるという目的もあり、藩政改革の一つとして行われたのである。

（玉木　一成）

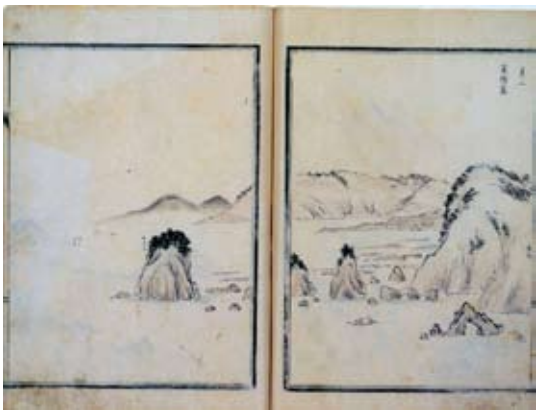
菜種島

白原田後の間に在り。半腹より上方小松叢生たる巒山、東面に暮春の頃菜の花全盛なり。時に黄雲潮に浮く。

うちかえす波に問ばや　誰が作る
春の田後の　菜種しま山

以上が菜種島についての無駄安留記の記述である。この島は岩美郡岩美町田後の城原海岸にあり、浦富海岸最大の島である。島の南には四つの岩島があり、菜種島とあわせて菜種五島といわれている。小さな島を従えているため、わかりやすく見間違えることはない。島の形状は円錐で、周囲四〇〇メートル、高さ六〇メートル、粗粒淡褐色の黒雲母花崗岩から成り立っているという。この島について『稲場民談記』には「此ノ島山ノ頂二イツノ代ヨリヤ有リケン。菜ノ花爛漫ト咲キ乱レ。彼ノ嶋山ニミチミチヌレバ。遙望一片ノ黄雲海潮ニウカビ、煙霞千里ノ風景誠ニタヘナル佳境ナリ。」とある。その昔、菜種を積んだ船が遭難し打ち上げられて菜種の花を咲かすのだとか、鳥とか風によって一粒の菜種が運ばれ、ふえていったものだとか伝えられているが、菜種の花が咲くという島の様子が地名になったであるのは間違いがない。

また天保十四年（一八四三）『浦富名所古跡独案内』にも「小船にて城原の方へ漕たれば、菜種島は其名も高き弥生の頃は波のとどかぬ丈けは花を乱して咲きぬ」とある。さらに明治四十二年の『鳥取案内』にも「菜



種島は此海辺の小島なり、断崖削立青松巖罅を縫ひ、暮春の候菜花全島を掩ひ、恰も黄雲の海潮に浮びたるが如く、其美観言ふべからず」とある。

以上の通り、春になると菜の花が爛漫と咲き乱れ、あたかも黄雲の海に浮かんでいるような美しい姿をみせていた風光明媚な島であるので、浦富八景の一つにも数えられており、次のような漢詩が詠まれている（「浦富八景」パンフレットより）。

菜種嶋晩鐘

海禽啄菜此移花　人不可攀巖點霞
知是天媛挿黄剰　金釵影帯晩鐘斜

海鳥が菜の花を啄んでこの嶋に花が咲いた。その巖には霞さえかかっていて人は登ることができない。その風景は天女が髪飾りをつけているようにも見えると詠われているが、今年の春の様子は下の写真の通りで、残念ながら島全体が菜種の花によって全面黄色になっているとは言いがたい。しかしながら、遠い昔と同じように菜種の花がこの小島に咲くことはかけがえのないすばらしいことであり、今後も菜種の花が咲き続けてくれることを願うばかりである。

（山根　優子）

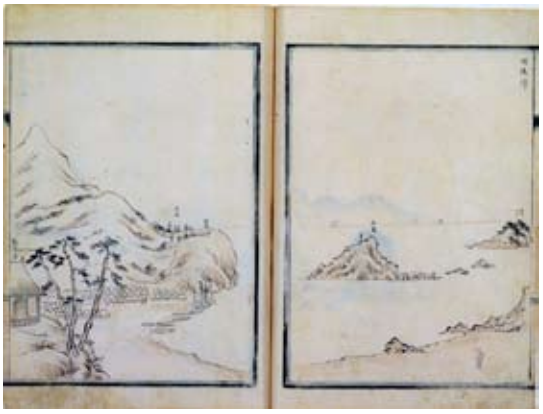
田後（たじり）浦

田後は岩美郡岩美町にある山陰海岸国立公園の浦富海岸の東肩に位置している。西は奇岩、岩礁、洞窟が続き、東に向かっては一転して砂浜が多くなる。

無駄安留記に描かれていた田後浦の全景は、現在もほぼ同じ形を留めているが、現在では、向島の辺りに防波堤が築かれている。

『鳥取県文化観光事典』（鳥取県文化観光局文化振興課、二〇〇二年）によると、本格的な築港は嘉永元年（一八四八）に始まり、鳥取藩により藩米の賀露港への廻送をその目的として築かれたようである。向島の南南東部分から北向きに約五〇メートルの捨石防波堤が築かれたのだが、「千両づくり」と呼ばれ当時としては大金が投じられたにも関わらず、明治二十三年（一八九〇）に暴風雨で全て流されてしまった。以後第七防波堤まで営々として工事は続き、その後の昭和四十九年（一九七四）に産業道路等も整備され、百三十年近くにわたった築堤工事はようやく完成したのであった。

この「田後」という名前の由来は広田郷という地域の後に位置するためだと言われており、網代と同じように、文禄年間に石見国（現在の島根県）の漁民が移住して定住してきいたと伝えられている。貞享五年（一六八八）の戸数は百六十八、寛政七年（一七九五）の戸数は二百で、町内の他の漁村地区より早く大村を形成していたと言える。



現在の田後港は、漁獲は沖合い底引き網によるズワイガニ、カレイ、ハタハタ、エビ類で、その中でも特にカレイの水揚が多い。今から十二年ほど前の昭和五十七年の時点では、水揚量は全体で三〇〇〇トン内外で、その金額は二〇億円前後となっている。

このように、田後の地は無駄安留記に描かれている頃から漁村として栄え、美しい景観は現在も昔とほぼ同じ姿のままである。そして、それは地域の人々の支えによって、まもられているのであった。

（尾崎　淳）

荒砂神社

『新編岩美町誌　下巻』によると、荒砂神社の創建年月日は明らかでないが、白鳳期（七世紀後半）に浦富元宮町鈴見山に観請したと伝えられている。大同元年（八〇六）八月、蒲生川が氾濫し、浦富平野は一面濁流に飲まれ、その時に社地社殿が悉く流失した。そのため同年十一月十五日、現在地に建立鎮座され、大神社荒砂大明神と呼称した。明治初年、荒砂神社と改称し、村社に列せられた。祭神は大物主命（大国主命）で、例祭日は四月十日（第二日曜日とする）。五穀豊穣・海上安全・豊漁の神として、特に漁師たちの信仰が厚い。

同じく『岩美町誌』によると『浦富名所古跡獨案内』に荒砂神社のご神体にまつわる伝説が記述されている。永見久三郎という漁師が朝早く浦富海岸の高台に登ると、眼下に見える波の間に大きな鯛がいくつも並んでいた。久三郎は釣り道具を用意し大鯛を一匹釣り上げた。そして、この鯛を大喜びで家に持ち帰ったところ、その腹がまるで朝日が昇るが如く光り輝いていることに気がついた。そこで大鯛の腹を割ってみると、中から黄金の大黒天が出てきた。久三郎は大いに驚き、自分の家に祀ることは恐れ多いとして、浦富海岸の前にある宮島に大黒天を祀った。これが現在の荒砂神社の発祥の伝説である。また、一説には次のような話もある。大同元年八月に起こった川の氾濫で荒砂大明神のご神体が流されてしまい、村人は必死で探したが見つからなかった。それから半年が過ぎた頃、向島から鋭い光が発していた。平八という漁師が近寄ったところ、一匹の大鯛が腹から光を発しながら岩の上を跳ねていた。その鯛を持ち帰り、腹を割ってみると、村人が探していたご神体がそのままの姿で出てきた。村人たちは宮司と相談し、今度は向島が眼下に見える場所に神社を建て、そこのご神体として祀った。この神社が現在の荒砂神社であり、向島はそのときから宮島と言われるようになったという。ご神体が鯛の腹に宿って竜宮から帰ってきたので、氏子は長い間、鯛を神のお使いとして崇め、絶対に食べなかったという。このことは『因幡志』にも「村の前波打際の島の上に鎮座あり、其の島を宮島という。昔此神鯛の腹にやどりて出現し給う故に、氏子の人々鯛を食はずという」と記述されている。

左甚五郎の高弟小倉圓三郎の手による本殿の五段の龍の彫刻（上の写真）は見事で、無駄安留記でも「社頭渾て佳景なり」とあり、その素晴らしさを称えている。

（岸本　美花）

雙子島・万燈島

無駄安留記によると、羽尾の崎まで砂浜に沿って道が続いていて、その浜の沖に、雙子島、万燈島という名の島があり、風景がとても面白いとある。そしてまず、雙子島について、次のような狂歌が残されている。

ふた子嶋　母の恵の　海の面に
見るめも同じ　そだち成りける

豊かな恵をもたらす海に同じように育てられた二つの島と、子供を育てる母のやさしさを重ねて、この風景が美しさを讃えている。

実際に調査に行ったとき、無駄安留記の絵にあるような「フタゴ」と書かれている二つの島は確認できなかった。『新編岩美町史 上巻』に載っている地図と、無駄安留記にある雙子島の位置を比較してみると、羽尾鼻・地蔵崎のそばに「二子島」という名の島があり、これが無駄安留記に書かれている雙子島ではないかと考えられる。

また、万燈島は無駄安留記の絵では海上にあるように見えるが、現在の写真では砂地となっている。しかし、万燈島について無駄安留記には「万燈島にて毎歳七月十六日の夜諸霊祭のため篝火を焼とかや」と記し、毎年七月十六日の夜、さまざまな魂をまつる諸霊祭をするために篝火をたいていたという。続けて詠まれた狂歌には、

玉祭る　万燈嶋の　光には
海の魚等も　浮み出らむ

とあり、その魂をまつる万燈島の明かりによって、海の魚たちも浮かんできてくると書かれてある。『新編岩美町誌』によると、その年に没した人を弔うため、盆の十五日に火をかけて死者の霊を鎮魂したという。無駄安留記に書かれた諸霊まつりはこれにあたると思われる。なお、この祭礼は終戦後に行われなくなったという。以上の記述から考えると、当時万燈島は海上にあり、諸霊祭も行われ、住民の信仰が存在したことを示している。

（玉木　一成）

『新編岩美町誌　上巻』より

七坂八峠

山陰道は現在の国道九号線、もとの古代行政区画である五畿七道のひとつである丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐の八カ国で構成される。そのなかで、因幡の鳥取城下から因但の国境へ向かう道を但馬往来と呼ぶ。但馬往来には蒲生峠を通るルートと海岸線を通り七坂八峠を越えるルートの二つがある。

但馬は山が海岸線まで張出していて道路が整備しにくいため、京都のほうへ通じるには蒲生峠が本道とされ、秀吉勢の因幡進攻にも再三利用されており、また慶応四年（一八六八）春、山陰道鎮撫使の一行もこの峠を越えて鳥取に向かった。鳥取から蒲生峠まで六里十二町、蒲生から峠まで十七町、峠から千谷まで二十九町あった。

七坂八峠の因但境には一本松があったようだが、樹齢三百五十年という境松は今は松くい虫のため枯死して、松の切り株だけが残り、「七坂八峠の一本松」と彫刻された標柱が建っている。

天保二年（一八三一）、細田万斉が旅日記に「此里より七坂八峠をこへゆく程に、此坂の半なる所に但馬・稲葉の国ざかへなる所ありてやすらひければ松一もとおひ繁れる有。かりそめの旅ながら、我国を離れゆく事の物うくぞおぼゆ。

わかれ路や只一もとの松風を
　千々の重ひに聞きすててゆく

峠をくだれは、因幡の国陸上村に来り、また坂こへて羽丹生村（羽尾村）に来る。まき谷村を過行バ、日暮て浦とみむらに宿りぬ」。とこの一本松を歌に詠んでいる。

以上、とくに断らないかぎり『歴史の道調査報告書　山陰道』（鳥取県教育委員会、一九九一年）を参照した。

無駄安留記中には、因幡から但馬へゆく旅人は、苦労して七坂八峠をこえるよりも、船賃を払って「北磯」から出る船にのって海を渡る、と書かれている。また「因但の堺の松」についても、「陸上の山下に洞あり。盗賊穴と言伝ふ。往古但州方の旅客の衣財を剥とりしよし。此山の頂に因但の堺の松あり」と記されている。無駄安留記が書かれたのは細田万斉の旅日記の頃より約三十年後である。

（八田　麻未）

牧谷蔵王権現

牧谷蔵王権現は、岩美町牧谷にある標高三二八メートルの金峯山の頂上近くに鎮座する金峯神社のことである。無駄安留記には「深山に鎮座。山路数町松柏鬱々としたる高山。諸人尊信す」とある。また『因幡志』によると「竹美の山腹に鎮座あり。土俗牧谷の権現と崇敬す。村より竜王寺へ十六町、寺より権現社へ八町」とあり、また『鳥取案内』（本城常雄編・明治四二年）には「文治年間に源頼朝社領を寄進し、又文和年間には、山名氏清、治世祈願の為、社領を寄付し、且つ三十二院を置き壮麗を極めたりし。」と記述されている。かつてはかなりにぎわっていたのだが、現在はこの神社を残すだけで、中世・近世に参道であった道を利用する人は全くなく、十数年前に調査に入られた岩美町教育委員会の方にお話を伺ったが、その際にも、三十二院の跡も参道もはっきりわからなかったとのことである。そこで『因幡志』の絵図に基づいて調査を行った結果、現在は次のようになっていた。

牧谷にある金峯神社の登り口にある示す石燈籠（大石燈籠）から北に向かって少し歩き、夜啼地蔵のところを右に曲がって、ＪＲの高架をくぐり、田んぼの道を進んでいくと、崩れた鳥居の跡に出る。ここから金峯山を正面に見ながら進んでいくと沢に出る。この沢沿いの道は、現在林道に整備されつつあるが、道の側面や側道に石組の道を何回か見つけた。この道がかつての参道であることは確かなようだが、『因幡志』の

絵にある、石塔も滝も分かれ道も見つけることができなかった。地図の左上から右下へ向けて赤くなぞったのが、このときたどった道である。

次は神社からの道を調査したところ、神社に向かって左手に『因幡志』の絵の通り石畳の道があった。これをたどっていくと、山の側面を巻くように道が続いている。二〇〇メートルくらい進むと先に記した鳥居の跡の地点を見下ろす場所に出る。この道の中にはところどころに石がかたまっておいてあるところもあり、これがかつての三十二院のあとだろうかと想像できる。しかし沢に下る道が発見できず、旧道を完全にたどることは困難であると思う。地図の右下から左上に向けてなぞった赤い線がこのときたどった道である。

この旧道のかわりに現在は山の反対側の相谷というところから車道ができており、神社への参拝は車でいくことができる。この神社の上方にはテレビ塔がたくさん立っており、かつての修験道の山は新しい姿をみせている。

明治維新以後途絶えてしまった山での修行だが、近年修験道にたいする人々の関心は高まりつつある。ここ東部にあるかつての修験道の場は山の生命を感じるにふさわしいものである。国峯から牛ヶ峯、そして金峯山へと続く、山伏たちのたどった道を再び歩くことができれば、そこで修行をしていたかつての人々に思いをはせる事ができるなど、山から学ぶことがあるのではないかと思っている。

（山根　優子）

大石燈籠

この大石燈籠は岩美町の牧谷の蔵王権現旧街道入り口に現存しており、無駄安留記には岩井郡の牧谷蔵王権現の項に「街道の傍に大石燈籠を建り。嘉永の頃田後に来し間師の建るところ也。当国一二の自然石なり。海濤あらき時船人祈誓すれば神火を照らしたまふとかや。」という記述がある。現代語に直すと「牧谷蔵王権現への参道である街道の傍らに、大きな石燈籠が建っている。嘉永（嘉永年間は一八四八年～一八五四年）の頃田後にやってきた間師が建てたものだという。自然石を使った建造物としてはこの因幡の国でも一二を争う大きさである。海の波がひどくなったとき牧谷蔵王権現に祈ると、この燈籠から不思議な光が出て灯台代わりになるそうだ。」となる。「神火を照らしたまふ」と敬語を用いている点から当時の人の神仏への畏敬の念が垣間見える。

『因幡之国牧谷村　龍王寺と金峯神社誌　論説　紀州熊野信仰と金峯山』（堀英明、二〇〇五年。以下『論説』と記す）によれば、大石燈籠と呼ばれるこの燈籠の高さはおよそ六メートル、正に威容と呼ぶに相応しい。無駄安留記にも

人の眼に月程高く照らすなり
松より上の石の燈籠

という歌がある。現代語訳では「松よりも上の高さにある燈籠に点る灯りは人の目から見れば月ほどの高みから地上をて照らしているようだ」となりそうだ。この灯りは恐らく前述の逸話の神火を指し、「高く」は神仏と水夫を助けるその慈悲の崇高さも意味していると思われる。伝説を意図して作られた歌だろう。作者もこの燈籠とそれにまつわる伝説には詩情をそそられたとみえる。

本文でも話題になっている石の

出所については、『論説』によれば、海中から引き上げた、谷から切り出したなど諸説がある。様々な説がある、ということはそれだけこの燈籠の大きさと不思議さが人々の想像力をかき立てたということだろうか。

燈籠本体の材質は粒の大きい御影石である。またその建築法は『論説』の見解では、エジプトのピラミッドのように周囲に砂を盛り上げ、石をその砂に載せて積み上げていって建てたとなっている。砂は近在の砂浜から運び、燈籠を建て終わったら元の場所の戻したのではないか、と推測されるということだ。

燈籠の台座には多くの人名が刻まれているが、『論説』ではそれは燈籠を建てる際の費用を寄付した寄進者の名であるとされており、そこからこの燈籠が牧谷蔵王権現への信仰の結果建設されたことがわかる。蔵王権現の参道の傍ら、という立地条件からもそれは明らかである。実際燈籠の近くには左の写真のように「金峯神社へ二十里」という道標もある。

『論説』に記されている伝説の中に、但馬（現兵庫県）・因幡の沖合いを経て運行する船は国境を通過する際、金峯山神社（牧谷蔵王権現を勧請）に祈願しないと船が進まない、という逸話があった。そのことから、同書では燈籠の建設もこの伝承にもとづいたものと考えられている。無駄安留記にも水夫を救うという伝承があり、この二つの伝説に基づいて考えると牧谷蔵王権現は海と関係が深いように思われる。同書によると、台座銘には近郷鳥取だけでなく但馬の住人の名もあるというが、これは当時但馬と因幡が海路でつながっており、但馬の人々もまたその航路での安全を蔵王権現に祈ったということだろう。建設工事を請け負った石工に関しては但馬だけでなく備前（現岡山県）からも呼んでいると同資料にはある。海路と牧谷蔵王権現への信仰を通した当時の国々の結びつきがこの台座銘には刻まれているというわけだ。

また寄進を行うということは裕福でなければできないことであり、それが可能な人々の存在が場所ごとに記されたこの燈籠は、当時の各地域の経済状況や裕福な名家・旧家の歴史やその分布を考える上でも重要な資料となり得るものであると、『論説』でも考えられている。

（岡村　由季子）

陸上邑（くがみ）

陸上邑は、現在の鳥取県岩美町陸上である。まずは、無駄安留記に書かれている本文について触れてゆきたいと思う。

村民塩を製す。最上品にして吉。

仕立ては　なかなか雪を欺むけり
風にも散るな　波の花しほ

これが、無駄安留記に書かれていた本文と狂歌である。これらより、陸上邑が当時から最上品の塩を多く生産した村であったということがうかがえる。これについて、『新編岩美町誌　上巻』の記述によると、陸上は鳥取藩の御三家（池田御本家及び東館、西館の両分家）などに御用塩を納め、良質の塩を産出したことで有名であったようである。この地方でいつ頃から製塩の業が始まったのかは定かではないが、「藻塩焼きつつ」（『万葉集』巻六）とあるように、藻を利用する時代を経て、自然浜の利用から挙げ浜の利用へと推移したものであろうと思われる。

藩初の頃には塩田も海岸線に沿って各地に営まれたようで、岩井郡（現在の岩美郡）においても大谷、湯山、大羽尾、小羽尾、浦留、牧谷、陸上が挙げられている。ところが、幕末になると「塩浜役」という年貢を上納することが困難となり、塩浜役御免の嘆願書が出されて、とうとう天

保末年にはほとんど塩をつくることをやめてしまい、徐々に各地の製塩業は衰退してゆくこととなったようである。

また、実際に現地調査に行き、昔製塩を行っていたという男性にお話を伺ったところ、この方は戦後製塩を行っておられ、その頃は陸上の家が十～十五軒に分かれて、浜に小屋を建て、そこで塩を作っていたそうである。製法としては、海水を固めてせんべい状にし、その上にまた海水をかけるということを繰り返し、固まった土の上に付く結晶を煮詰めて、こして、塩を作るという大変手間のかかるものであったらしい。この方によると、今では陸上でも製塩を行っている家は無いということである。きれいな浜と水が無ければ製塩は出来ないため、時代の流れや環境の汚染も影響しているのではないだろうか。

次に、無駄安留記に書かれていた狂歌について。これを現代語訳すると「出来上がった塩は真っ白で、誠に雪にも引けをとっていない。風が吹いても散るなよ、波の花塩よ。」となる。作者も、陸上の雪のように白い上質な塩を見て、感動したのかもしれない。美しい海辺とそこから出来上がる上質な塩がよほど印象に残ったのであろう。

このように、無駄安留記にもあるように良質の塩を産出したことで昔から有名であった陸上邑であるが、現在ではその面影はほとんど残っていない。無駄安留記を通して、名所や景観を新しく発見し、それを現在と比較して見るという楽しみがあるのだが、その逆に、この陸上の製塩のように現在では廃れてしまっているという場合もある。時代の流れであるので仕方ないとは思うのだが、残念であると感じずにはいられない。

（尾崎　淳）

地蔵の台座

夜啼地蔵（よなき）

夜啼き地蔵は国道一七八号線を浜坂方面に行き、吉田川を渡って少し内陸に行った線路の脇にある（2ページ地図⑲参照）。現地調査に赴いた際、その様子を無駄安留記の絵図と比較したところ、現在は松もなければ背景の二つの山もなかった。そして背景の二つの山は現在の夜啼き地蔵の位置から南のところに類似する山があった。これらのことから夜啼地蔵の安置されている位置は当時とは変わっているといえよう。

また、現在の地蔵の台座を見ると「弘化二乙巳歳七月」（一八四五）と彫られていた。無駄安留記の上巻が成立した安政五年（一八五八）より十年以上前である。おそらく無駄安留記の作者もこれを見たのだろう。

無駄安留記には、「松下に石尊あり。嬰子の夜啼きを止る。松の皮をとりて燈せば、啼止むこと速やかなりと」とあり、松の下にあるこの地蔵は子どもの夜泣きを止めてくれることが書かれている。狂歌には、「夜啼きする　児を持つ宿は　石尊を　今宵もまつのともし火のかげ」とあり、夜泣きする子どもがいる家では今夜も松の皮の灯火を燈して夜泣き地蔵の御利益があるのを待っている、とある。

夜啼き地蔵は現在までにその姿を変えている。以下にその変遷の様子を調査で発見できたものを用いて順に示す。

まずは一七九五年の絵図で『因幡志』のものである。次は一八五八年の絵図で無駄安留記のものである。次は一九七三年の写真で『郷土資料研究 第一集』という本のものである。そして次は一九九一年の写真で『鳥取県歴史の道調査報告書 第八集』のものである。そして最後が現在の地蔵の写真である。

ここで次のことに注目してほしい。無駄安

『因幡志』より

『郷土資料研究 第一集』より

『鳥取県歴史の道調査報告書 第八集』より

留記の絵図では地蔵はほこらの中にあるが、一九七三年の写真では外に置かれていることである。このことから、『鳥取県歴史の道調査報告書 第八集』にある「再建されたものであろう」との記述は、「再建された」と言い換える必要があると考えられる。

次は、夜啼き地蔵の『因幡志』の絵図と無駄安留記のそれとの違いについてふれていく。両者は細かく見ていくと様々な点で異なっているが、その中から背景の違いに焦点をあてた。無駄安留記では「山」になっているが、『因幡志』では「海に船が浮かんでいる」という部分である。

調査にあたっては二人の作者の視点が異なるのではないかと推測し、江戸時代後期の地図にあたった。そして、『因幡志』の絵図に書かれている「羽尾への道」という記述を頼りに方角を合わせてみたのである。すると、「海」が見えるためには「羽尾への道」との記述が道の反対側の位置にある必要があることが判明した。そうしないと背景には山しか見えないのである。はたして『因幡志』の作者はどのようにして海という景色を見たのだろうか、と謎は深まった。

また、『因幡志』にはこの地蔵は「木造」であること、そして「鳥取品治村の地蔵と一対で、すこぶる古仏である」と載っている。前者については、無駄安留記では「石尊」となっているので別の地蔵に変わったといえる。後者については、『岩美町誌』に現在の景福寺の小路の側にある地蔵のこととあるので現地調査した。するとその場所には次の写真のように地蔵があった。

しかしそこには一対の地蔵という証拠はなかった。長年この辺りに在住されている方もこの地蔵に関してご存知ではなかった。したがって調査ではこの地蔵が一対の地蔵であるのではないだろうか、という推測の域を出ることはできなかった。

以上のように牧谷の夜啼き地蔵は不明な点が多い。今後調査を続けていく価値は残っている。

（川添 祐紀）

鳥取市品治の地蔵

現在の夜啼地蔵

岩常城跡

まず、無駄留記中に見られる岩常城に関する記述だが、

是吉見氏代々居城。後三上兵庫頭移居。近年迄天守址に梨樹残り。是を採て喰へば腹痛するよし。

とある。吉見氏が代々居城し、後に三上兵庫頭がそこに移った、近年まで天守跡に梨の木が残っており、それを取って食べると腹痛を起こしたということが書かれている。三上兵庫頭とは東楊蔵王（とうようぞうず）という僧の還俗名である。

平成十年（一九九八）四月二十一日、県指定史跡として指定され、現状は山林となっていて、登山道も整備されている。二上山城は、南北朝時代、文和年間（一三五二～一三五六）に因幡の国（鳥取県東部）に勢力を伸ばしていた山名氏により築城とされており、後に因幡の守護所とされた。

巨濃郡（現岩美町・鳥取市福部町）で産出される金・銀・銅といった鉱産資源、当時の因幡の国の中心地であった現在の国府町方面への交通路の確保、そして古くからの海運で栄えていた岩本の姿をおさえるといった経済的な面を持つ一方で、二上山城は軍事的・戦略的にも非常に優れた立地条件を備えていたと考えられる（『新編岩美町誌　上巻』）。

『二上山城址発掘調査報告書』（岩美町教育委員会、一九八〇年）によると、

日本中を争乱の渦に巻き込んだ南北朝時代には全国各地に数多くの山城が築かれたが、その一つである二上山城は、戦いのための機能のみを備え、住居施設としての役割が完全に分離されていた典型的な南北朝期の山城といえる。しかし、標高三〇〇メートルを越える山城は麓の館と離れていて不便であること、また因幡守護所としては位置的にあまりに但馬の国（兵庫県北部）寄りであることなどから、やがて守護所移転という事態をむかえた。また戦国時代の半ばになると、城は軍事面以上に、政治・経済といった社会的中心地としての性格をよりはっきりと持つようになった。そして鉄砲の出現に代表される戦術の変化なども追い打ちをかけ、やがて二上山城は城としての機能を失っていくことになる。

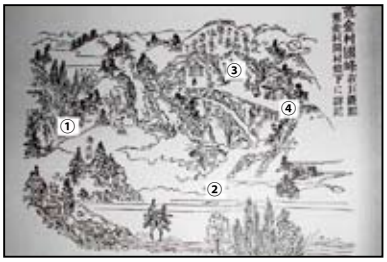
無駄安留記には次のような狂歌が掲載されている。

今は其影だになしの一本や
　むかし残ると岩常の城

この狂歌を解釈すると、「現在その城の面影さえもなくなって、梨の木が一本残っているだけだ、昔の姿が残るとはいえない、岩常の城は」という意味である。「なし」には梨と無しの、二つの意味が掛けられており、岩常城跡が寂れてしまった様子が良く現れている。

（八田　麻未）

荒金山中国峰（くにがみね）



『因幡志』名所旧跡図絵より

国峰は、岩美郡岩美町荒金集落の南方にある、標高五五五メートルの山である。地元では行者山とも呼ばれており、現在では地元の住民以外、登山をする人はほとんどいない。国峰とは、一般的に、古来山岳信仰の対象であった地方霊山の総称である。行者山を「国峰」と呼ぶ理由について、『稲場民談記』には、「是ハ和州大峰ヲ移シ、国中ニテノ峰ニ用フルガ故ニ国峰トイフ。當国ニ限ラズ、国々ニ有之。昔ハ国之峰ヲ立テ、山伏此所へ絶エズ参籠セシト云フ。」とある。かつて、この山は、因幡の国における一大修験霊場だった。

国峰の古跡に無駄安留記の記述の通りに番号をつけると上のようになる。この絵は『因幡志』の名所旧跡図絵であるが、無駄安留記の絵とよく似ている上に、次に記述する各地点の位置がわかりやすいので、こちらに番号をつけておく。

私は平成十八年の五月二十八日に地元の人たちと一緒に行者山に登った。絵や図絵にかかれたところが現在どのようになっているか報告する。

1　弁天社

現在「弁天堂」と呼ばれている建物が存在する。ここは祭りの際にこもる堂宇であり、行者山が女人禁制であった明治時代まで、女性はここまでの参拝しか許されなかった「女人堂」でもあった。

弁天社

狗かえし

行者堂

焼け残りの祠

2　狗かえし

絵を見ると、大きな岩が行く手をふさぐようにたっている。このあたりの道は山の斜面にもうけられており、崩壊が激しく、写真のようにロープを渡してある。無駄安留記には「人跡希なる深山登り下り艱難を経て犬返りの岩間或は杖を力とし根を拳りて往ば飛泉あり」とある。犬も引き返す難所であるので「狗かえし」と名付けられたらしい。

3　行者堂

絵のとおり、頂上直下の岩窟に収められるように建てられた堂宇である。ただし絵に描かれた堂と正面の位置が異なり、現在は参道に対して横向きになっていた。堂の中には、像高約八〇センチの彩色された木造の役行者像が安置されている。県立博物館の福代学芸員のお話によれば、本尊の役行者像は明治八年の製作、現在の建物は昭和二十二年に建造されたもので、棟札のもっとも古いものは「寛延三年」（一七五〇）という記述がある。

4　焼け残りの祠

無駄安留記の記述に「役行者熊野権現側爛燼（ヤケノコリ）の小祠を置き」とあるのがこれで、小さな祠の中に焼けた木片が祀ってある。『岩美町誌』には「秀吉の鳥取城攻略の時に大伽藍を消失し、今日行者堂に祀られている焼け木は、この時のものだと伝えられている」とある。

無駄安留記の国峰の項の最後には「国峰や螺の音絶えし巌にも花の紐のみときむすずかけ」という歌が記されている。無駄安留記の時代にすでにいなくなっていた山伏たちだが、近年、岩美町内在住の大峰行者が行者山への峰入修行を始め、祭祀に関わられるようになったそうだ。地元の人々も公会堂を「行者の館」と名付けたり、「行者山にのぼろう」という取り組みをするなどして、国峰が後代まで受け継がれるよう活動しておられる。私もこの調査を通して地元の人々が行者山をとても大切にしておられることを実感した。

（山根　優子）

長谷寺（ちょうこくじ）

長谷寺は岩井郡長谷村、現在の岩美町長谷に現存する寺院である。無駄安留記の絵は少し高い所から見下ろすような構図で描かれており、また現地は背後と左右（方位では北と東西）を緩やかに山に囲まれた場所なのでそれらの山から見て描かれた、あるいは現地で見た風景と山から俯瞰した風景を合わせて描かれた物と思われる。現状をこの絵と比較してみると、背後の山などが当時の面影を残している。

無駄安留記本文には「尼寺　什物　頂戴の蝋石の寿老人、そのほか数品経典御歌などあり。堂宇美なり」とあり、現代語訳すると「長谷寺は尼寺で、置いてある物品には頂戴した蝋石の寿老人、そのほかに数点経典や和歌などがある。その堂の建物は美しい」という意味になる。

『新編　岩美町誌』にこの長谷寺は鳥取藩池田家第四代当主宗泰公夫人の桂香院の帰依により徹要尼という尼僧を開山として建立されたとあった。桂香院は夫の亡き後幼い息子に代わり藩政に携わり学館を開くなどして活躍した人物で、こうした才覚に加え紀伊徳川家出身という家柄もあり、婚家の池田家でも重んじられる存在だった。紀伊徳川家とは将軍に嗣子のない時、跡継ぎを出す徳川御三家の一つで、当時諸大名より高い地位に置かれていた。この桂香院から代々尼僧が住職するよう申し渡されたので長谷寺は尼寺となった。

池田家、特にその夫人の帰依の厚かった長谷寺は藩主や夫人から宝物を贈られる事があり、本文に挙げられている品々も池田家から「頂戴」した物と思われる。お寺の方に話を伺ったところ、文中の寿老人というの

は中国の漢の武帝に仕えた東方朔の像で、彼には不老長寿の桃の実を食べて長生きしたという伝説があるため長寿の老人、略して寿老人と書かれたと言われている。この東方朔は他にも多くの伝説や奇行で有名な人物である。この像は朝鮮から将軍家へ伝えられ、その後池田家から徹要尼に下された歴史のある貴重な物なので現在は公開されていなかった。

「堂宇美なり」と評された堂の内部には鳥取城の池堀の蓮を描いた見事な襖絵があり、朝鮮から輸出された高価な絵の具を使ったらしく比較的変色が少なく往時の美しさを偲ばせている。経典、和歌などは桂香院が奉納した物で（『鳥取県立博物館特別展「女ならでは世は明けぬ」図録』より）、桂香院ほか藩主・夫人等の位牌、池田家の家紋などもあった。こうした品々からも長谷寺と桂香院の関係の深さが窺える。

他に無駄安留記には

鶯のけさなく声もきたるなり
　この山寺に経をよめとて

といった歌も詠まれていた。現代語すると「鶯の鳴く声が聞こえてくることだ。この山寺で経を読めと。」といった意味か。「けさ」は恐らく「今朝」と寺の縁語である「袈裟」の掛詞で、「経」もお経の「経」と鶯の「ホーホケキョ」という鳴き声を掛けているものと思われる。山深い寺で修行に励む尼僧に感心した作者が、その熱心な姿を仏道修行を促すかのような声で鳴く鶯になぞらえて作った歌だろう。

（岡村　由季子）

香林寺境内古墳

香林寺は岩美町浦富にあったが、現在は廃寺になっている。現在通幻禅師の生誕地と言われているところに香林寺はあった。無駄安留記にも、通幻禅師の生誕にまつわる話が記述されていた。通幻禅師（通幻和尚）とは南北朝時代の僧侶で、諱は寂霊である。曹洞宗の通幻派を創設し、本山「永沢寺」を開いた。

鳥取市景福寺十五世（弥峰禅師）が、隠居するときに作られた寺が香林寺である。はじめは末寺である岩美町白地の竜泰寺に引っ越すことになったのだが、白地は不便な土地なので浦富へ引っ越したいと役所へ願い出て、移された。倉吉荒尾氏の三代荒尾秀成の室、香林院の二十五回忌にあたって、この竜泰寺が香林院の牌所となったので、香林院の名を冠して普請のうえ、香林寺と号した。したがって、香林寺の前は竜泰寺と言っていた。香林寺の代々の住職は景福寺からやって来ているので、隠居寺の性格を持っていたようである。しかし、香林寺は明治の初めに廃寺になっている。寺を維持するための経済基盤を失ったために廃寺となったようである。

この香林寺は、万延元年（一八六〇）三月に江戸城桜田門外に攘夷浪士の襲撃をうけ、非業の死を遂げた大老、井伊直弼の壮年期に、その師となり開国思想を鼓吹した仙英禅師が得度した寺としても知られている（以上、『新編岩美町誌　下巻』）。現在の「通幻禅師生誕の地」の写真の一番左は「土葬神（つげのさい）」と呼ばれる碑碣である。元禄十一年（一六九八）に景福寺十七世和尚の建てたものである。通幻禅師を生んだ母親を葬った墓の跡を「土葬神」と呼ぶ。この碑文には、景福寺の弥峰禅師が調べた通幻禅師の生まれたいきさつが記されている。通幻禅師の父は因州石井郡細川の人で名は太郎麻呂、母は浦住岩湘の長者の娘である。太郎は以前より京都に住んでいて毎年故郷に帰省していた。太郎と娘は一目で愛し合い、まだ将来のことを語り合っていないのに、多くの村人のそしりを受け、太郎は京都に帰ってしまった。娘は衝撃をうけて病気となりついに死んだ。娘の父母は哀しんだが、どうすることも出来ず近くの丘に葬った。娘の魂は空にさまよって京都に行き、あたかも夫婦のように太郎と仲良く暮らし、やがて子供ができた。娘は、私は親に背いてあなたと結婚した。親に対してすまないと思っていると太郎に言った。そこで二人で故郷に帰った。太郎が先に長者の門を入って、「無断で娘を妻とした

ことをお許しください」と言った。娘は幼児を抱いて村の入り口にいた。父母はこれを聞いて驚き喜んで走って出たが娘と幼児は見えず、ただ乳幼児が娘の墓の上にいるのを見ただけであった。父母はわが目を疑うだけであった。そこで墓を掘り起こしてみたら娘の顔は生きている人のようであった。父母は声が出なくなるまで泣き、幼児を養育しようと思った。幼児は立ち去る人にすがりつくようにして墓上で泣いた。村人は婦人が餅を買って来て墓の中に入るのを何回も見た。以後この墓を「土葬神」と名づけたが、村人は「都気ノ左伊」と呼んでいる（『旧岩美郡の石碑』より）。以上が碑文の内容の一部である。

上の写真中央にあるのは「子持地蔵」である。「子育て地蔵」とも呼ばれていて、寛政二年（一七九〇）に建立された。拝めば体の弱い子供でも無事に育つという信仰がある。一番右は曹洞宗通幻派の祖である通幻禅師とその母を顕彰する「母子愛碑」である。昭和六十三年九月に建てられた。

『岩美町誌』では、通幻禅師が岩美町で生まれたとなっていたが、生誕地には異説があって、京都で生まれた説、九州出身説など全国に伝説が残っている。

通幻禅師生誕の伝説は、『因幡志』によると次の通りである。諸国遍歴の僧侶が香林寺の辺りを通りかかった。するとどこからか赤ん坊の泣き声がした。真新しい墓の下から赤子の泣き声がするので、近くの人にそのことを話してその墓を掘らせてみた。すると、墓の中から、死んだ若い女性と生まれたばかりの赤ん坊がいた。その赤ん坊が後の通幻和尚になった、というものである。

無駄安留記では、墓の中から赤ん坊が生まれたという記述はない。話の内容は、次のとおりだ。京に行ってしまった男を女が追いかける。二人には、子供が生まれて、子供を育てた。二人は子供が生まれてから三年後に帰国した。さて、彼らが国に帰ってきたとき、女は自分の家はここから近いので一人で自分の家に帰ると言って、男に子供を預けていなくなってしまう。男は女が帰ってくるのをしばらく待つが、なかなか帰ってこない。そこで女の家へ行ってみて、家の人から実は女が三年前に死去していたことを知らされる。つまり、死んだはずの女が夫と三年間子供を育てていたということになる。この話に出てくる子供が後に出家して通幻和尚になった、と記述されていた。

「土葬神」の碑文、『因幡志』、無駄安留記に記述されている話以外にも、通幻和尚にまつわる伝説はさまざまなバリエーションがある。通幻和尚は、多くの人に慕われてきたということだろう。

（岸田　祐子）

子持御前墓（こもちごぜん）

子持御前の五輪塔は鳥取市福部町細川の駟馳山のふもとにあり、三上兵庫頭内室の墓として伝えられている。『因幡志』によると、三上兵庫頭は但馬守護山名祐豊の弟で、幼い頃に仏門に入って東楊蔵王と称し但馬出石の宗鏡寺の住職をした。しかし城主不在となった岩美町岩常の二上山城の新たな城主として迎えられ、その後新井村（現岩美町新井）に道竹城を築いてそこで政務を執り行うようになった人物だ。

『稲場民談記』には三上兵庫頭豊範と称した、と記されていて、無駄安留記では「山名氏」、「三上殿」と二通りの名称で書かれている。

子持御前こと三上兵庫頭内室がこの地で果てることとなったいきさつが『稲場民談記』に記されている。永禄七年（一五六四）に山名豊数が道竹城を攻めた。三上兵庫頭は敵の勢いに押され敗走するが、その途中、田んぼの中で馬の足が稲にからまって身動きが取れなくなる。敵が近くまで迫っていたため「もはやこれまで」と思いその場で自害した。三上兵庫頭内室はその時、細川村まで逃げていたが、夫の死を知り、そこで自害した。三上兵庫頭内室はその時妊娠していたため、その土地の人々は子持御前の墓と称し、五輪塔を祀ったと伝えられている。この五輪塔は安産の守り神として地元の人の信仰を集めるようになったということだ。

子持御前の五輪塔が描かれた絵は無駄安留記にはなく、その見た目は「大五輪なり」と述べられている。しかし、子持御前の五輪塔は『因幡

志』では「小き五輪」と記述されている。何故このような記述の違いが起こったかは、無駄安留記の拾遺巻を見ていくことで明らかとなる。拾遺巻では子持御前の墓は村人の墓と同じ所にあると書かれており、「大五輪」と表記しているのは大蔵左衛門（矢尾左衛門）の五輪塔についてである。この五輪塔は「細川村端七山途辺左山麓大五輪有」と記されていて、子持御前の五輪塔と同じく駟馳山のふもとに位置することが伺える。実際に現地の子持御前の五輪塔を見たところ、小さな五輪であった。そして、子持御前の五輪塔がある場所から少し離れた所に大蔵左衛門の五輪塔が存在した。このことより逸処が子持御前と大蔵左衛門の五輪塔を混合し、大五輪と誤記したと考えられる。

ここまで、三上兵庫頭は寺で住職をしていた東楊であったという説明をしてきたが、現在ではそれは史実とは違う、という説もある。また、三上兵庫頭討伐の軍を出したとされる山名豊数についても、永禄七年という時期に道竹城を攻めることは不可能である、という意見もある。五輪塔の前に立っている看板には、三上兵庫頭は山名豊数に攻められて討ち死にし、その内室がこの場で自害したという説明がされている。この伝承が一般的にはよく知られているが、史実と違うかもしれない。では、子持御前は一体誰なのか？ということになるが、もしかすると三上兵庫頭と全く関わりのない人物がいつの間にかその内室として伝わっていった、という可能性も考えられる。三上兵庫頭内室の悲劇は、信仰心を盛り上げ、より強くするための彩りだったのかもしれない。

（岸本　美花）